序　　説

学校長　秋　元　照　夫

この紀要第12集の内容は，共同研究・教科教育研究・特殊研究の三つの部門で構成されている。われわれが，昨年度から立ててきた諸研究計画の中心に置いて，意欲的に取りくんできたのは共同研究である。それにしても，その成果は，未だ中間報告とも呼び難い段階であって，グループ研究の共同の討議・作業でまとめてきた所産を分担執筆したものである。内容については研究の結論の発表というよりは，グループ間の相互連絡，全体の共通理解，今後の研究構想の基礎のために提供する仮説的考察，資料的記述が多いものと考えられる。御賢察を願い，御指導を乞う次第である。

既に第11集で記述しておいた通り，共同研究の着手は，本校創設以来20年の歴史を通じて集積されてきた教育の理論及び実際に関する研究について，客観的視点に立って，反省評価するほどでなくても，回顧再考察することの必要を感じた時に開始された，と言ってよい。あの当時の教育改革の進展過程にあった新制中学校・高等学校についての啓蒙的・試案的な研究，あるいは一般学校に率先して標準的・模範的な教育経営の諸形態を実際的に解明し実演する研究，という大学附属学校の存立の性格や意義が見直されたのである。この際，自覚する研究の動機や目的について，学校の内部よりは外部の，すなわち大きな社会の要請に対応して，われわれの視点を多少にかかわらず転換することの必要が再認識されたのである。

そこで，今日，世界的にもまたわが国でも切実な問題となってきた「中等学校の教育改造をめざして」の研究というだいたいの構想が立てられ，われわれ各自のいだく関心と視点が自由に発表され，相互的にまた全体的に討議調整された結果，同志的に集結して，研究分野を五つに分けて，グループが成立した。勿論，A・B・C・D・Eのグループにわたり研究の目標や内容が体系化統一されることは論理的に望ましいことにちがいない。しかし，当初から時間をかけてそのためにのみ論議をつくすよりも，それは，各グループの研究の進行や展開につれて，そのなかで明らかになる関連，すなわち対照や比較などの過程を通して必然的に成立されてゆく，ものと期待したのである。

この期待は，附属学校としての長年の研究を特色ずけてきた実践的立場から生ずるものである。例えば，中等教育で改造されるべき諸問題事項が，教科内容，生徒の管理・指導，施設設備，進路指導，管理・事務などの諸分野ごとに，理論的に解明され，解決のための仮説試案が定立されて，その実証段階に進むことになれば，一つの学校における実践的研究である限り，その改革更新の計画また実施の過程については一貫した実際の構造や形態が具体的に検討されなくてはならない。すなわち，学校という教育経営の諸活動の現実過程を通して協同的に取り組み処理してゆくならば，どうしてもそれぞれの問題事項は，直接的にまた間接的に，相互的に関連し，また全体的に統合ずけられてゆくあり方がそのままで発見把握されてくるにちがいないからである。

いま，五つのグループの研究の関連や統合のことについて記述するのではないが，ここに余白を割いて，研究の経過を要約し課題の中心を指摘しておきたい。

後期中等教育の教育改造について、Aグループの研究は核心的位置にあるとみてよい。既に，高等学校普通科における教育課程を中心とする問題を，広く世界的視野のなかに展望し，また歴史的視点に立ってわが国が今日当面している現実的な課題を発見することに考察を集中してきている。就中，現在の社会発展・科学技術の進歩に対応する教育革新の基底として、教育課程・各教科内容を現代化することが主張され，また，その問題点が探求されてきた。これを一層具体的に考察するために，現高校普通科生徒の進路の実態（60%は進学せず就職するような）と，社会各層がもつ高校に対する幅広い教育要求とを対照し，また教育研究として高校教師に意識された問題事項を分析して，「後期中等教育ではハイ・タレントの養成よりも諸方面に転移する可能性を与える教育が重要である」と総括的に吟味されている。

このような所論に立って，各教科について先進諸国における諸事例を分析・比較研究し，これに基づいて内容再編の試案を作成し，その実験的研究に進みつつある。教育課程改造についての討議に出された見解には，例えば，「地理と地学を統合して理科で行う」

「歴史の内容に科学史・技術史を加える，または，科学史を独立して設ける」「倫・社の中に科学的思考方法，論理をとり入れる」「中学校の技術を再検討し，高校で工学または技術学を教科として新設する」などと提案されている。

生徒の管理・指導についての実践的研究としては，小徳目や細則を強制しないよう，発展的目標をもって当るべきであると主張するBグループは，その見解の下に，既に，生徒の躾，中学校の道徳と高校の倫社・保健・LTとの関係，超学年的道徳の中核，学校の誇り・伝統，生徒の管理指導の組織化，生徒会活動とクラブ活動との関係、などについて問題の諸点が確認討議され，それらの問題の本質や条件を解明する各種の調査分折の結果が報告されたが，それらはさらに発展継続されて，現在実施中の管理・指導の方針と計画に実証的な根拠を与えている。

特別教育活動の中心となるホームルーム・ロングタイムの改善に著るしく貢献してきたのは生徒及び教官から出された報告の累積的記録の分折，成功経験を基礎とする再計画などであるが，問題は生徒に行わせる計画過程の運営形態にあるとされている。さらに、朝礼及び生徒集会において中・高を分離また合同させる形態の試みは，生徒の関心と問題意識の差異に合致したことが明らかで，その成功は確実となってきた。生徒会活動の活発化をねらっての室長の優先的選出，また室長会議の開催も予想通りの成果を収めた。なお，個人指導カードによる資料は蓄積を増し，重視されてきている。

授業諸活動の効果をあげ，校内生活を充実する上に，各種の施設設備がもつ条件と生徒の使用態度は相関し，またその影響は大きい。この実態とその問題検討について，Cグループの研究は引続き発展し詳細な分析が進められている。普通教室で使用される黒板について生徒の座席の前後左右の位置の相違から生ずる効率の差異の問題が注目されている。また，プールの使用について，放課後自由に開放されている現状をみると，中学生男子を除き，他の生徒殊に高校生女子は低率であり，この対策が考案されている。

高校における進路指導の実践には困難な問題場面がある。Dグループは進路指導の視点から，既に，特別教育活動とくにその負担が教科学習へ及ぼす影響を追求してきたが，生徒がもつ「意識」に問題の成因が予想された。したがって，生徒に適性能力に対する自己意識から生ずる学力差，またそれらを基にする進路観の形成の過程が問題視されてきた。特に，進学・希望職業の方向づけを狭くして追求する型と，広くしてて適応する型が注目され，この問題の解明につとめながら，進路指導の体制，年間計画を整備する対策が考案されている。

教授・指導の実践過程について，その健全性・合理性・効果性が高まるように，計画化・組織化を配慮する管理・事務の機能は重大である。すなわち，現行の学校の運営機構，校務分挙などを合理的に調整するための根拠を提出することを目的とするEグループは，今までに，教育計画を立案決定するための会議過程の動態，掲示・文書による連絡伝達の過程の実態などの観察・分析に着手していたが，それらは一層精密多角的に検討される。そして，各方面に長年集積されてきた諸制度としての各種の規則・慣例・要項などを収集分類し，ファイリング・キャビネットを用いて各人各様の利用に供する考案が進められている。

以上の記述は簡略に過ぎて，初めの意図を十分に達しているものとは考えられない。後に続いて詳述される報告内容によって補正していただければ幸いである。